



甚だまつり

石黒敬七

毎夏、八月の前半か後半、僕は郷里柏崎へ十日
余り帰る事になっているが、今年は八月八日から十
七日まで、海岸の定宿観光ホテルで暮した。
観光ホテルと云えばきいたとこはいいが、さま
ざまのいきさつで経営難におちいついて設備が
わるく、泊り客も尠なく、僕一人がいちばんいい
室に陣取っていて、いちばんの長逗留の客だ。考
えてみるともう今年で五年目位になる。

僕の室は西側角の室で甘畳敷程の土蔵座敷で、
左は番神峠、右は椎谷峠から柏崎海岸が一目に見

え、晴れた日は佐渡ヶ島も弥彦山も遙かに臨まれ
るといふ柏崎随一の眺望だ。

こんないい室を、僕みたいな者が、真夏のシー
ズンに十日も陣取っておれるのは、冥加の至り
だ。全く堀出し物といえる。僕としてはいつまで
もこの宿が、ゴタゴタ採めていて、経営が葉でな
く、設備がわるい方が都合がいいわけだが、来年
もそうであるかどうかは分らない。余り立派にな
ると僕なんかもう泊まれなくなるおそれがある。

堀出し物で想い出したが、今度の帰省中の八月
十五日、出雲崎からの招きで、港まつりを見物に
行った。これは出雲崎の漁船百余艘が五彩の旗を
満船に翻めかして、列を組んで港の内外をパレ
ードするもので実に壯観だった。僕は戦前戦後を通
じ、毎年郷里に帰っているが、この港まつりは初
めてだった。

所で堀出し物だが、この港まつりが済んでか
ら、町に一軒しかないという町端れの古道具屋へ
車を寄せてみた。

なにしろパリの蚤の市を東京に再現させて、

川路柳虹旦那から、

蚤の市わが日の本にうつしうえし

いしぐる旦那ほめんとぞ思う

とほめられた僕の事、早速蚤取り眼で店中を引

つ掻き廻して、堀出した品々は、

「古い越後縮布の女着物」「尺八」「煙草の火

入(徳川時代の染付)七個」「朱塗丸盆」「徳利

(二本)」「古いそば茶碗(廿個)」

といったもので、縮布の着物はこれをワイシャ

ツかアロハに改造する積りだ。

尺八は非常にいい光沢が出ていて、年代も余程

吹きこなされたものらしいが、僕が、

「これは良寛さんが吹いたものではないか」

と云うと、道具屋の大将が、

「良寛さんは尺八が好きで、よく吹いていたそら
です。所が良寛の遺品の中には、どこにも尺八と
いうものがありませんから、或いはこれなど、良
寛さんが吹いていたものかも知れませんが」

と調子を合わせた。

「とにかく何所かから、良寛遺愛の尺八というも
のが出て来ない限り、この尺八は良寛さんのもの
らしいという事にしておこう」

と、笑いながら、大枚五百円を奮発して、その
尺八も買物の中に加えたという次第。

(随筆家)

